

新春随想 不安の連続は安定

第二次池田内閣の官房長官に留任し、香川県を代表する政治家として、「四国新聞」に成田知巳代議士の随筆と並んで掲載されたエッセイ。

「近くて遠いもの、遠くて近いもの」は何かと問われて「それは大みそかと元旦です」と答えた話だが、中国の本に書かれてありました。なるほどこれはうまい答えです。

もつとも、よくよく考えてみると、世間にはこれに似た類推が多くあるようです。「遠い親類より近い他人」とか「遠交近攻」などということばも、ままならぬ浮世の苦もんを物語るものでしょう。もつとせんじ詰めれば、もつとも近いはずの自分の中にさえ、どうにもできない別の自我をもっているのですから、近いといっても当てになるはずはないものです。それにしても、一夜明くれば元旦という感激は、きのうの債鬼が笑顔でおめでとうというほどの大きい振幅をもっていることは争えないことです。

ところが、この振幅の大きい新しい感激を何度も繰り返してみてもいっこうにみずからの生活革命も社会の改造もできなかったというのが、われわれの偽らない述懐であります。しかし、それだから

と云つて、このような「時間の区切り」といふか「生活の折り返し」といふものがなければ、われわれの生活はよりしまりない、だらしないものになつていたであらうことも、理解できることであります。

この新しい折り返し目から自分と自分をめぐる集団のためになる何かをものにしたといふ願望にかりたてられて、それは結局むなしなものに終わるかも知れないとおそれつつも、われわれは新春ごとくに新しい出発に旅立つわけです。

時代は想像を絶した変化を経験しています。ことしは何が起るかわかりません。大いなる不安の連続です。世界をあげて「不安」の時代にさおさしています。しかしこの「不安」も連続すれば、それは一つの「安定」となり得るものです。度胸がすわつてくるものです。

私はこの不安定の中に度胸を据えて、新春の感激の中に光明を求めて前進したいと存じます。郷土のみなさまの健康と平安としあわせを祈りつつ、勇気を出して前進したいと思つています。

日暮硯

無役時代に「座右の書」としてあげた『日暮硯』
についての書評的なエッセイ。恩田空の精神は時
代を超えて枯渴することのない泉であると説く。

座右の書という訳でもないが、これまでも何度か読んだし、これからも折に触れて読んでみたい本が幾つかある。滝沢七郎氏の『日暮硯』などもその一つである。

これは、凡そ二百五十年程前の信州の真田藩の家老で、紊乱の極に達した藩政の見事な改革に成功した恩田空の事蹟を記した本である。恩田空に関する文献は、この本の他にも二十幾つかを数えることができるが、滝沢氏の本は、高雅な品位と独特の風韻をもっておる。これは滝沢氏自身が、深く恩田空に傾倒された秀れた事業家であるとともに政治家でもあるからである。

人はこの本を通じて、先ず恩田空の改革の手法の斬新、奇抜な点に瞠目する筈である。その着想はたしかに人の意表を衝く卓拔さをもつておる。またその実行に当っては、天機を捉えた周到緻密なお膳立てが用意されておる。その卓越せる着想とそれを実行に移す手法には舌を捲くものがある。しかし、それはあくまでも表相に過ぎないのであって、読者には、彼の行蔵の奥に純一なる精神が貫かれておることに気付かれるにちがいない。

その精神は極めて平凡である。即ち、一言でいえば、嘘言を戒めることと、百姓を愛敬することと、孤独に徹すること、に尽きるといえよう。この精神は平凡ではあるが、本来自由で凝滞することのない道であり、時代を超えて枯渴することのない泉である。小細工や手際のよさだけではこの道統に参入し、天人和合の妙機に至り得るものではない。恩田空の行蔵は、かかる妙機を私共に垂示してくれる。日本の歴史にも珠玉のような宝が、このような形でかくされておることは有難いことだと思ふ。

柳は緑 花は紅

宏池会会長時代に機関誌「前進」に発表したエッセイ。中国の蘇東坡の詩を引用しながら、政治に
とっていかに個性尊重が大切かを述べる。

私は見かけ通り、無骨で、無趣味です。強いて趣味はと問われると、まあ読書とでも申しませうか。どんなに身辺が多忙であっても、週に一度や二度はぶらっと本屋をのぞくことにしています。それも古本を漁る程の余裕はなく新刊です。私にとっては書店の店頭に漂っている新刊書のインクの新鮮な匂いに時代のホットな息吹きを感じます。

ひとわたり、新刊コーナーのタイトルを眺めただけで、世の中の推移が判るような気がします。そこには人々が何を考え、何を欲しているか、またかつて人間は何を問題にしたか、その顔、目、心などが、硝子ごしのそのように透明にのぞけるように思われるのです。

読書は魂の糧で、とくに俗事にとりまぎれ勝ちの政治家にとっては、精神の浄化、発想の鮮度と時世への嗅覚の涵養に、欠かすことのできないものです。ところが現実には、読書のために十分に時間をとることができないのも事実です。

それでも、これだけはというものは、決めておいて必ず読むことにしております。いまは社会学の時代かも知れませんが。私の選択は政治や経済のものよりも、今日の生きた記録の盛られている社会物に向い勝ちです。軽いものでは、隨筆、伝記の類いに手が出がちです。

ことに、政治をやる人間は、小説を読まなければいけないと思えます。小説というものには人間生活全体が現われています。小説から、われわれはしばしば深い問題意識が触発されることがあります。文学と政治は不可分な関係にあるようです。そういう意味で小説をもつと読みたいのですが、正直に言つて小説まで手が出ないのが残念です。

好きな現代作家は司馬遼太郎です。彼の主要作品は殆ど読んでいます。彼の大阪人らしい「人間中心」の史眼、発想の原点、それに柔軟鮮烈な把握力には、政治家としてはもとより、それ以前に人間として教えられる所が多々あります。

ご存知ないかと思うのですが、英国のジスレリーは、偉大な政治家であるとともに、秀れた文学者でありました。政治家は、絶えず、人間生活を、法律とか経済とかに分解しないで、全体として捉えることが大切です。そういう頭の訓練を積むことによって、国会の質問、答弁等の論戦にはもとより、日常の政治活動に人間味を通わせることができるように思います。

「柳は緑 花は紅」という言葉があります。これは中国の偉大な詩人、蘇東坡の絶唱です。そのの意味するところは、自然のままに対象を観る、物事には自然の流れがあるということになりました。柳は柳で個性的であるし、花は花で個性的である。そのように民族や個人にとつても、あるいは集団や政党にとつても夫々個性があります。そういう個性を、無理やりに一つの型にはめて割り切つてしまふような無理はやらないことです。それは、つまり寛容に通ずるわけですが、更に言えば、も

のことを色眼鏡で見ずに、在りのままの姿で見ることだと思えます。そして柳は柳、花は花の個性をそのまま尊重しようということです。しかも、個性は個性として生かしながら、何かその中にまとまりをつけていく、それが政治というものだと思うのです。

それから政治家にとって必要なものは、そういう人間と自然に対する思いやりと自らの謙虚な反省です。俗説では、図々しさが政治家の必要条件のように言われていますが、私は政治家である前に、一個の人間であらねばならないと考えます。そうであってこそ始めて物を素直に全体として理解することができ、人や自然に対する畏敬の念も生れてくると思えます。その点、私は常に謙虚に反省し、かつ春風駘蕩という程の余裕はないのですが、個にして全、全にして個の境地に到達すべく努めたいと考えております。

生きがい

宏池会会長時代に郷里の観音寺青年会議所二〇周年記念誌に寄せたエッセイ。汗をかいて困難に立向かう過程が人生である、と提言している。

人は各々何かの「生きがい」を求めているものである。唯単に物理的に生きていくにすぎない人はいないはずだ。高い名声を求める人もあろう。豊かで優雅な生活を願っている方もあるであろう。強い権力と支配を希望している人もあるにちがいない。芸林の奥深く踏みこみ、真理の嶺を究めたい方もあろう。親子や親族と仲睦まじく、友人知己との暖い友情を希求してやまない人も多いように思う。

ところが、われわれの人生には、そういう希望や願いが常に必ず満たされるといふ保証はない。保証がないばかりか、往々にして逆の結果を生みかねない場合が多い。名声を求めて不評を買い、富貴を求めて貧窮に陥り、権勢を求めて転落し、暖い友情を求めて冷たい反目に泣くことがあるものである。

しかしここで失望し、自暴自棄になるのはどういふものであるうか。若し凡ての願いが叶えられる

よくなれば、この世の中は無重力状態になり、生きること自体がナンセンスになるにちがいない。前途に困難があり、障害があるからこそ生きること自体が意味ももち、生そのものが可能になるとみるべきではなからうか。

ゲーテは「人生は結果ではなく過程である」といつておる。汗をかき力をこめて当面する困難に立向ってその打開を試みる過程が人生である、というのである。この骨の折れる過程に意味があり、その過程を一步一步踏みしめて行くことが「生きがい」というものではなからうか。

平衡心と兼愛

外務大臣として昭和四七年九月二十九日に日中国交正常化を果たして帰国した直後のエッセイ。政治や外交の要諦は、中道平衡心と兼愛を基礎とする行動にあると説く。

人間・社会・国家が、ある大きな問題に直面するときは、いずれの時代のものが重要であり、またいずれの問題が小さいかというような区別はない。問題は、常に大きくて新しく、これに対応する人間・社会・国家は、その時と処とに応じて、それぞれ真剣に、力と英知をつくして立向っていかなければならぬ。

しかし、現代の社会や世界は、今までにない大きな変革期に臨んで、今までにない困難な問題を抱えている。そこには、過去に経験したことのないと思われる程度の発展と混迷、協和と不均衡、富裕と停滞とが、尺度の異なる次元で渦を巻いて、共鳴したり反発したりしている。これは迷妄の世界ではないが、高度の進歩の歪みを調整して、軋みを沈めるための過渡的な矛盾の世界であるかもしれない。

試練は年輪と共に高まる、という言葉があるが、長い過去を背負った世界は、新しい時代への脱皮のため、一段と高まった試練に直面しているのである。

このような場合、これを打開して、問題を大局的に解決するための行動では、個々の内容のいずれが大きく、いずれが小さく、また何が賞賛に値し、何が批判に屈すべきかというようなことは、どうでもいいことであつて、最も重要なことは、人間・社会・国家・世界が、全体において、いかなる方向に針路を求めたか、そのために現在いかなる結果を生じたか、またそれが未来において何を期待している状況を作ったかということであり、これからの世界の選択は、きわめて高い英知と協力を必要とすることになるであらう。

「どんな賢明なことでも、すでに考えられている。それをもう一度、考え直す必要があるだけである。」といった大詩人がいるが、現在の経験は未曾有のことに見えても、賢明な再考による解決が、根本であるかもしれない。

これからの世界は、今まで以上に、当為と意欲と能力、憧憬と努力と協調を必要とする時代になっている。この中のいずれが欠如しても、現在の大きな転換時代を、われわれ並みの、新しい理想世界に導くことは困難にならう。

世界は発展と富裕に向つて、急角度で転換上昇しながら、ブロック化や多極化の声が大きくなっているが、これが対立抗争の視点からしか見られないようなものにしてはならない。

小は個人関係から、大は世界問題に至るまで、内容は異質でも、根元は人間の関係であるが、ここに生成される種々の問題を解決するに当つての、大切な数多い要素を煎じつめると、私はこれを、平衡心と愛とに求める。

日本人は、とかく極端に傾斜して物事に熱中するかわりに、実情に依じて、安易に反転する振幅過大の民族的欠陥を持っている。これは、能力や努力において優れているがしっかりした当為と意欲が

確立されておらず、憧憬が散漫に動揺するからであるが、世界構成の有力な一員として、これからの日本は、このような民族体質をできるだけ改めるよう努力する必要がある。

わたくしは、中国の墨子の思想に興味を感じている。

墨子は、戦乱と術策の渦巻く戦国の人間不信の時代に生れて、これを変革し、連帯感を回復するために身命をかけた行動人である。その思想の根底は、人間が平等に愛し合い、お互いの利益のためにつくすという、兼愛交利で、他人を別扱いにする別愛を排撃している。

「こころみに衆害のよりに生ずるところを本原すれば、これ何によりてか生ずるや。これ人を愛し、人を利するによりて生ずるか。即ち、必ず然るに非ずるといわん。天下の人を悪みて人を賊する者を分明せんに、兼が別か、即ち必ず別なりといわん。然らば、このこもこも別なるものは、果して天下の大害を生ずるものなるか。この故に子墨子は曰く、別な非なりと。」

これは、いい言葉である。

これからの政治や外交の要諦は、二四〇〇年前の大聖の言説をまつまでもなく、中道平衡心と、兼愛を基礎として、当為と意欲の確立と、努力と協力の行動にある。

これは、言葉は美しいが、実行面では気の遠くなるようにむずかしい問題である。しかし、われわれは共に、その方向に向いて、可能な限りの努力をしなければならぬのである。

記

納得のいく人生

三木内閣の大蔵大臣時代に、香川県出身の若者たちによる後援会の機関紙に寄稿したもの。性急に理想を求めるあまり短絡的に政治不信に陥ることのないよう戒める。

秋も深まり朝夕は冷えこむようになってまいりましたが、御健勝にてそれぞれのお仕事に精を出しておられることと思います。私も引き続きスケジュールに追われ自由な時間の少ない毎日ではありますが、健康に恵まれ御奉公しております。

今や政治も経済もきわめて難しい時期を迎え、すべての人々が、それぞれの問題を抱え、苦心されておるように思われます。かつてのように、ただひたすらに豊かさを求めて、ひた走りに走っていた時には、後をふりかえるひまもなく、したがって悩んだり迷ったりすることも少なかったように思われます。ところが今は何をすることも困難がともない、人々は考えあぐみ悩みを持ち、いらいらした気分になりがちです。しかし、イギリスの詩人ブラウニングも言っておりますように、もしこの世が非常に快適ならば、天国が最高だとは思わないのに違いないのであります。そしてこの世はきわめて退屈なものであったらうと思いません。むしろ悩みと苦しみに満ちたこの世が、いわば人間にとっては本

來の姿であろうと思ひます。それをいかにして現在以上に悪くしないか、できうれば少しでもよくしていかか私たちの課題であるうと思ひます。限りなく続く悩みと苦しみの中に、喜びと平和を見出していくことこそが、人生というものではないでしょうか。先はまだまだと思ひつつ、重い荷を背に遠い道を少しづつ歩んでいくのが人生の姿のように思われます。

現在各方面で政治不信が叫ばれております。戦後三十年を経たのに政治は少しもよくなならない、むしろだんだん悪くなつてゐる。政治がしつかりしないので、われわれのくらしが苦しくなる。ロッキード事件ではないが、政治家は何かしら悪いことをしてゐるのではないかと等々が取沙汰されてゐるのであります。これらの声に接し政治に携わる者の一人として責任を痛感いたしてあります。今日のよくな世相の中でこれらの声は一層増幅されてゐるのではないかと思ひますが、素直に耳を傾けますます襟を正してまゐるつもりです。

ただ私からお願ひいたしたいことは、性急に理想を求めるあまり短絡的に政治不信におちいることのないようにということであります。いつの時代でも政治がよくいわれた時代はなかつたと思ひます。また國民が政治を見捨てて、政治がよくなつたこともなかつたと思ひます。自分が考へてゐるよつに政治が動かないからといつて諦めてはならないと思ひます。闇があるから光があるわけです。闇から出てきてこそ光の価値がわかるのではないのでしょうか。人は自分の理想に忠実でなければなりません。簡単に現実に絶望することは、政治不信を売り物にし、これを利用してよつとする政治勢力を利用することにつながるものといわねばなりません。お互いに一回きりの人生ですから、自分で納得のいくよつな生き方をしてみたいものと思ひます。単によい結果を求めるだけではなく、われわれの一日一日のいとなみの過程一つ一つを大切に生きたいものです。

大切な選択

党幹事長時代に大平が一橋大の先輩として、「如水会々報」に寄せたもの。職場と妻という人生の二つの選択の大切さを力説する。

われわれの一生にとって、大切な節が幾つかある。まずどういう家に生れるかということが、大きな節にちがいないが、これは、われわれの意思を超えた問題で、ここでは問わないことにする。次は、どういう学校をえらぶかである。その点では諸君はすでに一橋を選び、一橋を卒業し、一橋ファミリーの人となられた。私は諸君の選択が素晴らしい選択であったことを祝福したい。一橋はたしかに素晴らしいファミリーであるからである。

その次に諸君には二つの節が残っておる筈である。どういう職場を選び、どういう妻をめとるかという問題である。

大部分の諸君は、既に職場を選ばれたことと思う。人の生涯にとって最終学歴を経た直後に選んだ職場が非常に重要である。職場はわれわれに勤労を求め、その対価を支払うところであるが、それよりも、そこで得られるパブリック・リレーションこそが、われわれにとってまことに大切である。そ

こで形成されるわれわれに対する評価が、その職場においてはもとより、その後におけるわれわれの生涯を決定するほどの重要性をもつものである。従って、われわれは職場内の人間関係はもとより、職場を媒介として結ばれる職場外の人間関係は、その一つ一つに真実をこめて対処しなければならぬものである。そのこと自体が諸君の人生そのものを形成して行くものである。

最後に、そうして、最も大切な選択は諸君が選ばれる妻である。そのことは人生の一つの選択といふよりは、そのことこそが人生そのものを形成する大切な素材である。ただこのことについては、語る紙幅が十分与えられていないので、ここでは結婚ということが、人生にとって一番大切な選択であるということだけを言っておくに止めたい。